特別支援教育実践マニュアル

＜No.14＞

子どもの気持ちが授業に向かう“しかけ”

～（教科）担任による支援 ～

子どもはみんな、一人一人異なる学び方をしています。

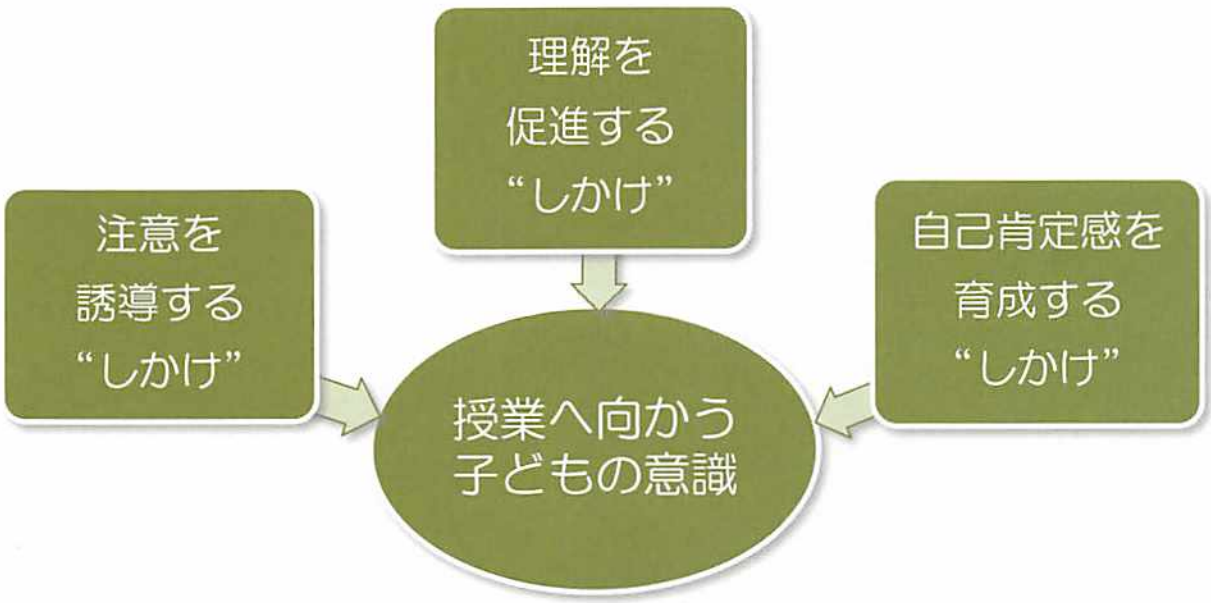
例えば、言葉による説明で明確なイメージを思い浮かべる子どもがいます。その一方で、図を使った説明でイメージを明確にする子どもがいます。

また、周囲のノイズ（視覚的・聴覚的雑音）を気にせず課題に集中する子どもがいます。その一方で、黒板まわりを簡素化したり、発言のルールを明確化したりすることで課題に集中する子どもがいます。

今号では、子どもの気持ちが授業に向かいやすくなるよう、いかに子どもの「注意」を誘導し、「理解」を促進し、「自己肯定感」を育成するかということについて、特別支援教育的視点から、いくつかの支援方法を紹介します。

ここに紹介する支援方法はどれも、支援を必要とする子どもだけでなく、多くの子どもたちの気持ちを授業へと誘う有効な手立てとなりえます。

＊「授業」と表記していますが、保育園や幼稚園では「活動」と置き換えて参考にしてください。



注意を誘導する

授業の導入部

＜「さあ始まるぞ」という雰囲気を作り　意欲・関心を高める ＞

◇ 国語の授業の導入部として、着席して授業準備ができた子から音読を始めるようにすることで、自然に学習に入り込むようにさせる。

◇ 社会や理科などで、前時の既習事項を使った「復習クイズ」を行い、学習意欲を高める。

◇ 学習内容に関連のある身近な話題を提供したり、写真や具体物を示したりしながら、問題意識を持たせて学習内容に入る。

◇ 本時の“めあて”と“評価規準”を示し、授業の流れを確認して、見通しを持たせる。

授業の冒頭から、子どもが活動しながら参加するようにしかけたり、学習内容を具体的にイメージさせたりすることで、気持ちを授業に導きましょう。

教師の立ち位置

＜ 黒板の前だけでなく　教室の様々な場所から ＞

◇ 理解の遅い子や、注意の持続が難しい子の席の近くに行き、その子の教材を使ってクラス全体に向けて説明する。

◇ 友だちの発表を聞いていない子の席の近くに行き、「ここまではっきり聞こえるように、もう一度言ってくれる？」など、（注意が逸れている子に対してではなく）発表した子に対して指示する。

◇ ときには教室の後ろから全体に話すことで、子どもに身体の向きを変えさせ、注意を再喚起する。

教師の一挙手一投足が重要な情報になります。教師が立つ位置ひとつで、子どもの注意を誘導することが可能です。

机間支援

＜ さり気なく関わり　意識を学習に向けさせる ＞

◇ 理解が遅れがちな子どもの席の近くに行き、ノートや本を指さしながら、注目すべき箇所を示す。

◇ 注意が逸れがちな子どもの席の近くに行き、机上の筆箱などの位置をさりげなく直す。

さりげない支援が功を奏します。計画的な机間支援をしましょう。

理解を促進する

アナログタイマー

視覚化

＜ 教示内容を視覚化し　図解して　瞬時に把握できるように ＞

◇ カラーチョークを使用する際は、明度の低い「赤・青・緑」の使用頻度を下げ、「黄」色チョークの使用を優先する。

◇ ゴムマグネットを活用し、「まず」「つぎに」など手順を示す言葉や、「めあて」「考え方」「まとめ」など学びの構図を示す言葉を書いておき、それを貼って板書を構造化する。

◇ アナログタイマーを使い、時間を量的にイメージ化することで見通しを持たせる。

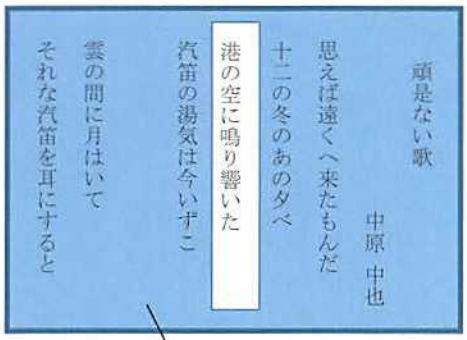
視覚情報は、提示し続けると単なる背景になってしまいます。
必要に応じて付け外しをするなどして、変化を持たせましょう。

学習補助具

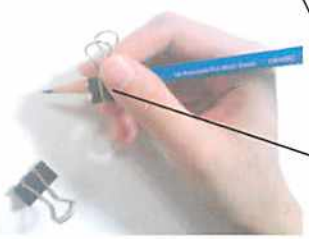
＜ 発達特性にそった 道具の選定 ＞

◇ 教科書の１行分の大きさを切り抜いたカラークリアファイルを使い、教科書に当てて読ませることで、「飛ばし読み」や「勝手読み」を減らす。

◇ 手先の不器用な子などには、家庭と連絡を密に取り、大きめのマス目のノートを使ってマス目内に書きやすくしたり、鉛筆にダブルクリップをつけて握りやすくしたりする。



カラークリアファイル



ダブルクリップ

学習に取り組みやすくさせるために、身近な物を工夫し調整しましょう。

音声言語

＜ 口頭で説明する内容が　具体的にイメージできるように ＞

◇ オノマトペ（擬音語・擬態語）を使い、動作のタイミングや勢いなどをイメージしやすいよう指示する（体育で「ゴロン で ピッ」、漢字練習の空書きで「トン スー サッ」など）。

◇ 一度に多くの指示をするのではなく、１つの指示で１つの活動を促す。集団が大きくなるほど「一時一事」を意識して指示する。

抑揚のある表情豊かな語り口で、子どもに生き生きと伝えましょう。

自己肯定感を育成する

大丈夫感

＜ 友だちの目を気にして　不安になったり緊張したりしないように ＞

◇ 子どものつぶやき（例えば「あ、そっかー」「あれ？」「でも、～かも」）を大切に扱い、全体説明で取り上げたり、机間支援で説明したりする。

◇ 「できた！はい！はい！」と挙手させていると、できていない子は焦ったり不安を抱いたりしがちなので、「課題を終えた子は、鉛筆を置き姿勢を整えて待つ」というルールを設ける。

◇ 課題を終えたら隣の席同士で確認し合うことで、自信を持って発表できるようにする。

◇ 自信を持てないでいる子に対し、机間支援をしながら、その子のノートや作品に対し、小声で「出来ているね」「これでいいよ」「後で発表してね」などと伝える。

◇ グループ学習の際、子ども同士で付箋を使って意見を出し合うなど、話し合い活動が苦手な子でも意見が出しやすくなるようにする。

子どもが間違えたときこそ、「大丈夫感」を抱かせるチャンスです。「なるほど、ここに注目したからその答えになったんだね」「あわてなくても大丈夫だよ」…教師の言葉が子どもの心に浸透します。

達成感

＜ 授業中に１回でも「できた！」「わかった！」という実感を抱くように ＞

◇ その子の実態に応じたプリントを複数用意し、子どもが選択できるようにする。

◇ 個に応じた目標（例えば、長距離走で「10 分間に５周と 3/4 周を走る」など）を立てて、着実に目標をクリアーさせる。

◇ 「振り返りノート」を作り、子どもが授業の終わりに反省や感想を書き、（教科）担任がその場で肯定的なコメントを記入する。

自分が目標を達成していることに気付かない子がいます。昨日までの自分と比較して、少しでもできるようになったという実感が持てるように導きましょう。

＊ ここに示した例は、数ある教育的支援方法の中のほんの一部です。まなびサポート事業の訪問相談では、各専門スタッフが一緒に有効な手立てを考えます。ご連絡ください。

まなびサポート事業

教育研究センター〈美浜北小学校内〉　381－7960・7961

まなびサポート相談室〈見明川中学校内〉　390－5204